

NAGOYA ラジオカフェ (2016-2018)

活動報告



2018. 03. 10版

名古屋大学大学院 情報学研究科 小川明子
東海学園大学 人文学部 北出真紀恵

※ 本報告は、小川明子・北出真紀恵(2017)「研究実践報告：送り手と受け手の対話空間を創るー名古屋ラジオカフェの試み」名古屋大学大学院国際言語文化研究科「メディアと社会」9号 (PP.57-70) に、第5回、6回の記録を加え、加筆・修正したものです。今後も修正する可能性があります。

はじめに

1.NAGOYAラジオカフェの企図

経緯

「Nagoya ラジオカフェ」は、コミュニティFMや、radiko などインターネットを介した新しいラジオのかたちが模索されるなか、ラジオの未来を多様な視点から考えることを目的に、CBCラジオ ディレクターの菅野光太郎、東海ラジオ放送のアナウンサー兼ディレクター、源石和輝、東海学園大学准教授の北出真紀恵、名古屋大学准教授の小川明子といういずれもラジオ番組制作に関わったことのある4名が世話人となって設立した研究会である。

本研究会の特徴は、ラジオ番組の聴取を媒介に、ラジオ番組などのメディア制作者、研究者や市民(ラジオリスナー、障がい者やNPO従事者など)、そして本学メディアコースの学生をはじめとする東海地方の大学や高校の学生など、多様な背景を有した人びとが、共にカフェで番組を聴き、意見を交わしあうことにある。昨今、ラジオは聴取率の低下が指摘されているが、災害時などにおいてその存在意義を見直されたり、また受信機がなくてもスマートフォンやパソコンで聴くことのできるradikoが好評を得ていたり、新たな段階に入っている。しかしそれでもなお、日常生活において、ラジオを聴くこと、ましてや他の人びととラジオ番組について感想を交わし合う機会は決して多くないだろう。

意図

Nagoyaラジオカフェでは、ラジオ番組の制作者は、普段生で触れることの少ない聴取者側の反応を目撃し、彼らの意見や疑問を聞き取ることでその聴取状況を理解する。一般参加者や学生は(もしかすとはじめて)ラジオ番組に出会い、その世界を楽しむとともに、同時に、聴取番組を媒介に、新規の知識だけでなく、他の参加者が提示した感想や新しい視座に出会う。そして制作者から説明を受けることで、それがいかに構成/制作されているのかを学ぶ。

つまり、Nagoya ラジオカフェは、視聴者の意見を聞き取るという点で、各放送局が設定している番組審議会の市井版ともいえる。また聴取者や子どもたちにとっては、現場の人びととのコミュニケーションを介した市井のメディア・リテラシー講座でもあり、互いに意見を交わし合うワークショップ的要素も有している。このように、本試みは、多義的な研究会である。

ちなみに「カフェ」という研究会の名称は、単にコーヒーを片手に語りあうという意味だけでなく、英国のコーヒーハウスが、意見を自由に交わしあう空間としてジャーナリズムや市民社会の出現に寄与した経緯による。同様の企図から、専門家と多様な市民が垣根を越えて自由に議論を交わすサイエンスカフェや哲学カフェの試みが最近では盛んに展開されていることも本実践企画において参考にしている。

実践の概要

2016年から2017年にかけて、名古屋大学で6回、平塚市で行われた市民メディア交流集会で1回、計7回のカフェを開催し、2018年には最終シンポジウムを行なった。



2. ラジオカフェの基本プログラム

① グループ分け

ディスカッションは6-7名の小グループで進行する。一つのグループには、メディア制作者(マス・メディア/ネット系メディア)と視聴者、研究者、学生などが交じり合うよう、事前申し込みの際に記された属性や肩書をもとにグループ分けをしておく。夕刻の開始なので、グループごとに軽食と飲み物を準備する。

② 作品概要と制作意図の説明

制作者から、作品の概要と制作意図について最小限の説明を行ったうえで聴取へと移る。

③ 聴取

参加者は、ラジオ番組を聴きながら、分かりにくかった点、疑問点、想像したこと、考えたことなどを付箋に書き込む。付箋に書き込むという作業を行うことで、印象や感想をなるべく細かく抽出し、記録すると同時に、作業を取り入れることで意識が散漫になるのを防ぐことも企図している。

④ 意見交換

参加者が気軽に発言できるよう、参加者たちは付箋をもとに、グループごとにA3の白紙に付箋を貼りながら印象を語り、意見を共有する。同様の意見である場合には、付箋を近くに貼ってグループ化するなどして、共通した意見、独自の視点等を可視化していく。

⑤ グループ発表

グループごと代表者が全体発表を行う。

⑥ コメント/フィードバック

寄せられた意見や疑問に対して、制作者側がコメントすると同時に、音声だけでは理解しがたい現場や人びとの写真を見せることで、参加者が思い描きながら聴いた世界との差異を確かめる。この作業はその現場のありようこそが正しいというわけではなく、ラジオは各自が自由に頭の中に世界を描ける場であること、その世界がそれぞれ実に多様であることを確認することが目的である。

またここでの意見や質問内容を踏まえて全体ディスカッションを行い、制作者側も聴取者とのディスカッションによって得られた知見を報告する。

3. ラジオカフェの記録

■ 第一回 Nagoya ラジオカフェ「『看取りのカタチ』を聴く会」

講師: CBCラジオディレクター 菅野光太郎氏

司会: 東海ラジオアナウンサー 源石和輝氏

日時: 2016.1.27 19:00-

場所: 名古屋大学全学教養棟北棟 Café Phonon

参加者: 32名

第一回の題材は、2014年度民放連ラジオ教養部門最優秀賞を受賞したCBCラジオ『看取りのカタチ』を取り上げた。この作品は、13年前から末期がん患者らの在宅医療に取り組む女性医師と患者家族を追った作品で、自宅での看取りを決断した家族と、その家族を支える医師の様子が綴られていく。参加者には、番組に出演する医師や家族、家の様子などを、音や声からイメージしながら聴いて欲しいとリクエストした。グループ内での意見交換の後、制作ディレクターの菅野氏から制作意図や秘話が報告された。出演者に取材を許可してもらった際、音だけの世界であるからこそ承諾され、音のみゆえに介護や看取りというセンシティブな現場にそのまま入ることができたこと。音声を撮る際にはピンマイクを使って大事な現場に邪魔にならない取材を心がけたことなどが、エピソードや写真とともに紹介された。出演者の写真がスクリーンに投射されると、想像したものと違うなどといった歓声が各テーブルから上がった。

最後に、最近ではそもそも座ってラジオに耳を傾けるといった習慣が多くの場合失われているなかで、どのようにこのジャンルを維持できるのかという問いかけとともに、時間をかけて制作されたコンテンツを一回限りの放送にしてしまうのではなく、ポッドキャストなど多様な方法で聴く機会を提供してもらえたらという意見も出された。

以下、この研究会で交わされた意見と見出された知見について簡単に振り返っておきたい。

1) 構成へのコメント

最も多かったのは、構成についてのコメントであった。「(看取られた高齢者の)誕生日を迎えることは難しいと思われるシーンからお祝いのシーンにいたる流れが素晴らしいと思った」「集中力が切れかけたところにBGMが入るなど工夫されている」「場面転換にナレーションではなく音楽だけが入る部分があり、そこでそれまでの情報や場面の整理が行えた」といったコメントの他、「音だけなので人物関係図がわかりにくい」といった意見もあった。一方、考えさせる内容であるゆえに「聞けば聞くほど映像が欲しくなる」「運転しながらドキュメンタリーを聴くのは難しいだろう」といったラジオ・ドキュメンタリーという様式そのものにつながる意見もあった。



2) 音で表現される世界と「死」

今回、ラジオ・ドキュメンタリーを初めて聴くという参加者も多かった。なかでも放送部に属する高校生は、音や声の構成を丁寧にメモしながら聴き、「声や音を頭の中で想像しながら聴くのが楽しかった」と述べている。ほかにも参加者の付箋には「各自が自由に頭の中に世界を描けることが楽しい」「声だけでその人柄、表情が見える」「生活の中のさまざまな音から自然に頭の中に様子が浮かぶ」「取材者はほとんど出てこないが、その対象者に入り込んでいることがわかる」など、音だけで表現される世界について、各自の内面で想像しながら聴いていたことを示す感想が多く記された。

さらに、「人の死をテレビで映し出すことは難しいだろうが、ラジオであるからこそ伝えられる」など、繊細なテーマと音メディアであることとの親和性についても多くの参加者が指摘した。出演者が亡くなる瞬間まで報じていることについては、他局の制作者、視聴者側双方から、取材現場が緊張しなかったのか、どのような取材プロセスを経たのかなど次々質問が出された。

また「画がないからか、自分に語りかけられているような気がする」など、客観的とされるカメラの視点を前提としたテレビと、音だけのメディア、ラジオとの違いが浮かび上がるコメントがあったほか、脳性麻痺のある参加者は、今回初めてラジオ・ドキュメンタリーを聴き「テレビだと録画して何度か見直さないと意味がよくわからないが、ラジオ・ドキュメンタリーは一回ですと理解できた。音だけなので理解しやすかったのかもかもしれない。初めての経験で自分でも驚いた。」と、障害とメディアについて考えるうえで興味深い感想を残している。



3) 個人の経験との接続

「25年前、がん患者の父を看取ったときのことを思い出した」「取材対象者は幸せ」など、中年以上の参加者は、自らの看取り経験と比較しながら語る傾向が見られた。一方で、そうした現実の経験を背景に番組を聴くことで、「出てくる人たちが素敵すぎてあまりにもリアリティに欠けるのではないか」「もう少し葛藤を見たかった」といった一般的な現状との差異が強く指摘されることにもなった。同様に、いまだ主流とはいえない在宅での看取りを番組で扱うことの意味を問う意見もあった。

日常生活において「看取り」について語りあう機会はそれほど多くないだろう。ここでは番組の共同聴取という行為が媒介となって、個人が経験した同様の体験が語られ、そうした個人的な経験が「看取り」をめぐる対話を生み出し、社会的な 이슈へと接続されている。そして参加者たちは、こうした「経験を語る」という行為によって、番組の取材や構成といったプロフェッショナルな領域に対して意見を述べ、アイデアを提起している点にも注意しておきたい。参加者の現実の体験は、メディア表象を批判的に読み解くうえでの契機にもなりうるのではないだろうか。

■ 第二回 Nagoya ラジオカフェ「声で語り継ぐ村の歴史ーラジオと朗読を手がかりに」

講師：東海ラジオアナウンサー 源石和輝氏

司会:東海学園大学准教授 北出真紀恵
日時:2016.4.20 19:00-
場所:名古屋大学全学教養棟北棟 Café Phonon
参加者:35名



第二回ラジオカフェは、東海ラジオのドキュメンタリー『いくさ遺産 村の言霊』を対象とした。参加者は、高校生、大学生、メディア勤務のプロフェッショナル、それに東白川村からお越しいただいた朗読グループのメンバー(番組に出演)など35名。番組は、戦死した兵士の手記と岐阜県東白川村に手作りで作られた戦争記念館の描写から始まる。山奥の小さな村に残る記録や手記、そして当地人たちの語りから、空襲もなく一見平和な村に残る戦争の記憶を掘り起こしていくのがこの番組の主旨である。小さな山村の限界を感じて満州開拓団に加わったものの、戦後の混乱のなかでたまされるようにして炭坑労働に8年間従事し、帰国したら土地もなく、偏見にさらされながら山間の土地を耕して生きのびた経緯。食糧がなく、軍馬をしとめなければならなかったときの鮮明な記憶。帰って来ない兄弟を毎日待ち続ける妹の想い。満州にわたった人、出征した人、留まった人。さまざまな立場から心の奥底に秘めた戦争体験が語られる。番組では、こうした記憶を語り継ごうと、本人たちに直接取材しながら手記を朗読する朗読グループ『夢風船』の人びとの取り組みも紹介される。

研究会ではまず、作品を全員で聴取し、メモをとり、グループごとに意見を出し合った。その後、この番組の制作プロデューサー・東海ラジオの源石和輝アナウンサーや制作スタッフから、音だけで聞いていた村や人びと、取材風景がどのようなものであったのかが写真スライドで公開され、頭の中に描いたイメージとの差異や共通点を確認した。第二回の研究会で出された意見は以下のとおりである。

1)構成へのコメント

-「音」への着目

戦死した兵士による母親に宛てた手記で始まる冒頭の「つかみ」で引き込まれるといった評価とともに、「SEによって東白川村や取材場所の風景が想起される」「SEだけで場面転換をしていて、BGMがないのが聞きやすかった」「音楽や声が過剰なテレビとは対極にあり、カメラの圧迫感から解放されているのがよい」など全編を通じて挿入されているSE(効果音)や、ていねいな音の撮り方についての好評価が多く聞かれた。その一方、「後半に話題を詰め込み過ぎではないか」「内容は飽きさせないが60分は長い」「地歌舞伎の部分は必要か」といった意見もあった。

- 世代間における印象の差 -「間」をいかに捉えるか

ところで第二回の研究会で最も注目されたのは、「間」をめぐる世代間のギャップであった。年配の参加者が「間が十分にとられていて、その間に考える時間があるって良い」と好意的に評価したのに対し、参加していた高校生や大学生はその後の制作者からの問いかけに対して、ほとんどが率直に「長い」と答えた。この傾向は制作者間でもあったようで、中高年のプロデューサーは若いディレクターが間をすぐに切ってしまうことに対して常に苛立ちを感じ、若手は間を長くとらなければならない理由がわからなかったという。この件に関してはこの場では深く掘り下げることができなかったが、今後、こうした世代間の印象のギャップについても考察していきたい。

2)自らの経験との接続

第一回で指摘したことと重なるが、「戦争」というテーマは、前回よりさらに聴取者の記憶や経験の語りを引き出したように見える。自分の父親が原爆後すぐに広島に入った時の経験、父母から聞いた戦争の経験、あるいは子どもたちが無批判に戦争ゲームを楽しんでいることに対する日頃の疑問が、番組の感想について述べるなかで表現され、「家族が離ればなれにさせられる戦争は嫌」「自分の子どもが銃を持って殺していくような姿は見たくない」など、戦争について、あるいはそれぞれの生活のなかで気になっていることと接続され、意見が提起されていった。逆に言えば、ラジオ聴取は、こうした各自の経験と接続されながら行われているといえる。

自らの経験が多く語られる要因のひとつに、ラジオ・ドキュメンタリーが音のみで表現されていることがあるかもしれない。「自分への問いかけをたくさんやれた有意義な時間だった」といった参加者のコメントに代表されるように、画像がないラジオでは、そこに挿入されるSEや「間」が、聴取者の内面に想像や思考を生み出し、そこから自らの経験を内省する機会を与えることになったのではないだろうか。

3) 歴史の当事者の声を記録するメディアとして -その意義と陥穽

教科書的な戦争の歴史は記録される一方、個人の経験や記憶は記録されがたい。すべてのグループで、一般の人びとの間に眠る戦争の記憶をいかに記録し、残していくのかについて多様な意見が交わされた。

戦争体験者の高齢化が進む中でその声の記録を急ぐべきという意見とともに、「語れない、語りたくないと思うことこそが、本来語られるべきなのではないか。それをどう表現できるのか」といった根源的な問いかけもあった。また一方で「(人を殺した経験など)平和な時代には身内には語りづらいことも、取材に答えることで、聞いてもらえた、伝えてもらえたとわかり、むしろ困難な経験が乗り越えられる(カタルシス経験)可能性があるのでは」といった意見も聞かれた。

本番組では、当事者の声をそのまま録音・編集し、放送しているわけだが、「当事者の肉声は、文字と違って、声から感情が伝わってくる」という意見が多く聞かれた一方、「声は近い。近すぎて聞いていられない」という意見もあった。

いずれにせよ、しかし、当事者の声を聞き取り、録音したとして、ラジオ番組とは普通であれば一度放送されただけで消え去り、あとは記録庫に眠るか捨てられるかである。放送されると同時に消えていくラジオという媒体は、歴史の記憶に役立つのだろうか。この会を通じて気づかされたことのひとつが、多様なメディアで記録することの重要性である。そもそもこの番組の企画自体、手記をまとめた本や史料を一堂に集めた村の戦争博物館がなければ生まれなかったかもしれない。人びとの語りを残そうとしても、戦時中の用語など、後世に生きる者には理解できないことも多々あるだろう。ゆえに、当時の姿を後世になっても高い精度で認識し、描き出し、確認しようとする際には、写真や手記、インタビュー動画や音声など、多様な様式でそのナラティブが残されていることが重要だといえる。

最後に、重いテーマを扱うこの番組が生き生きしているのは、村の知り合いの戦争の記憶を語り継ごうとする朗読サークルの存在が加えられていることによる。このパートが入ったことによって、様相が複雑になったという意見も聞かれたが、戦争という辛い記録は、果たして写真や手記、記録映像が残されるだけで「伝わる」のだろうか。当研究会に東白川村から参加してくださった朗読サークルのメンバーらは、戦争の語りを聞き取り、戦時中の用語など分からないことを調べていくことで、第二次世界大戦が「私たちの戦争になる」と語ってくださった。研究会の参加者たちは、彼女らの経験も交えて聞きながら、歴史を伝えていくには「当事者のことばを翻訳し、わたしたちにつなげてくれる人の存在が必要」「聞き手の想像力が問われる」と書き留めている。

記憶を記録し、語り継ぐなかで、その語り手のなかで一旦消化され、血肉となり、そこから身体を通して語られる戦争の記憶は、彼女たち自身の物語として受け継がれていく。W.オングが論じた口承の力についても再確認した研究会となった。

■ 第三回 Nagoya ラジオカフェ

「コミュニティとしてのラジオ -KBS京都 地域の高齢者をつなぐ取り組み」

講師: 東海学園大学准教授 北出真紀恵

司会: 東海ラジオアナウンサー 源石和輝氏

日時: 2016.7.27. 18:30-

場所: 名古屋大学全学教養棟北棟 Café Phonon

参加者:23名

第三回Nagoyaラジオカフェは、30年近い歴史を持ち、7月で放送1500回を迎えたKBS京都のラジオ番組『早川一光のばんざい人間』を聴取し、番組についてディスカッションを行った。この番組は、戦後、京都西陣に住民出資の診療所を立ち上げ、在宅医療のパイオニアとして地域医療に携わってきた早川一光医師(放送開始当時64歳)の声をラジオで多くの人に届けようと1987年に開始された生ワイド番組である。現在、番組では、入場カードにたくさんのスタンプがたまったりリスナーを表彰したり(最高は1200回以上)、リスナーにコメントを求めたり、参加者で『ぼけない音頭』を踊ったり、歌ったりと、高齢者を対象とした聴取者参加型となっている。しかし開始当初は、タレントではない医師のパーソナリティということもあって、早川医師の魅力がラジオでうまく伝わらず、さまざまな試行錯誤が試みられたという。あるディレクターは、早川医師の語りが今ひとつきこえないのは、閉ざされたスタジオからは聴き手が見えないからではないかと考え、講演会のように聴衆の目の前に座ることを提案し、スタジオを一般聴取者に開放した。またあるディレクターは局舎の真向かいの御所の空気感や鳥の声を取り入れるために、窓の開放を提案した。朝6時のスタジオ解放にあたっては、参加者にラジオ体操のスタンプ表のようなものを配って入場カードにするというアイデアが生まれたという。

今回の研究会では、早川医師が80代の頃の当該番組のダイジェスト版を流し、番組開始から20年アシスタントを担当した東海学園大学の北出真紀恵から上記のような背景が説明された。そしてパーソナリティである早川医師がどのような人物なのか、スタジオがどのようなかたちになっているのか想像しながら聴いてもらい、グループごとに意見を出し合ってもらった。

その後、2016年7月2日に行われた1500回記念放送の様子を撮影／編集した映像(名古屋大学大学院:小野洋文氏制作)を視聴し、現在92歳の先生の姿やスタジオ、集まったリスナーの様子を映像で確認した。早川医師は現在、多発性骨髄腫を患い、在宅で闘病を続けており、放送には家族に付き添われ、車椅子で出演している。車椅子の早川を囲んでの生放送の様子がカフェのスクリーンに映し出されると、会場から驚きの声があがった。その後、「想像どおりー想定外」「印象に残ったこと」「考えたこと」という点を中心に再び意見を出し合ってもらった。映像からは、早川医師が「見た目70代にしか見えない」という意見があった一方で、車椅子の姿に「声ほどはお若くないご様子」「さすがに90代になるとおつらそう」という意見も聞かれた。

1) 高齢パーソナリティの力

グループ・ディスカッションでは、冒頭で早川医師が多様な人びとに向けてあたたかな呼びかけをするなど、聴取者に向かって語りかける様子や、「年齢を感じさせない受け答えがすばらしい」「間のとりに方にも人間性がにじみ出ている」など、パーソナリティに対する高い評価が目立った。とりわけ92歳になっても、子どもの作文に対して瞬時に愛情を込めて応対する能力がすばらしいとの賞賛が上がった。同時にその魅力について「地域医療という核となる仕事や信念があるからこそではないか」「超高齢社会において、こうした魅力的な高齢のパーソナリティが持つ情報が求められている」「高齢者との関わりが少ない現代社会で、歳をとったらどうなるか、明るく教えられる先生の存在は貴重」といった意見も多かった。

ラジオ制作者からは、パーソナリティがどういった経緯で見つけだされたのか、またその人物像や、企画／制作／放送をめぐる質問が次々と出された。そして「早川先生のように、瞬時に、的確で温かいコメントができる人材は聴取エリアのおそらくどこかにいるのだろうけれど、低予算重労働の業界でどのように見つけ出せるのか」といった問題提起もなされた。



京都放送「早川一光の人間ばんざい」
1500回記念の様子(参考)

一方で、高齢者をステレオタイプ化しすぎた番組構成はどうか、今の高齢者はもっと現代的なのではないかといった指摘もあった。

2) 公開放送の是非

「私が印象を持っていたラジオ番組の製作現場と全く違う番組にただただ驚きだった」「番組というよりも、場を作っている」「集まってきた人たちが自分たちで番組を作るんだという意識を持ち、ラジオを自由に使っている。局は枠だけを用意し、中身は先生とリスナーに預ける。これは本当に局が勇気と信念を持たないとできないことだと思う」という感想に現れているように、公開放送というスタイル、とりわけ参加型に構成されていることに対して好意的な感想が多かった。メディア制作者からは、公開スタジオでの音声の調整や、番組の広告動向についての質問が寄せられると同時に、「僕たち作り手が勝手に怖がってしまっている部分を軽々と超えている」との声も聞かれた。

一方で、「スタジオに参加している人にとっては楽しい情報でも、果たして家で聞いている人は楽しめるのか」「高齢者にターゲットを絞り込んだ番組は公共性を旨とする放送としていかがか」といった疑問も出された。

公開放送の映像を見たあとのディスカッションでは、「リスナーが自由にくつろいでいることに驚いた」「音だけだと全員が歌ったり踊ったりしているように思えるが、映像を見るとそうでもないことに少しがっかりした」といった意見が交わされた。

3) コミュニティとしてのラジオスタジオ(北出, 2003)

北出からは、スタジオ参加者同士が互いに知り合いで、放送後はみんなでお茶を飲みにいったり、それを機に互いの悩みを聴きあったりといったコミュニティが生まれていることなどが紹介された。研究者である参加者からは、こうした「病院の待合室型ラジオ」の有用性を指摘する意見が出され、デイサービスとは異なる、メディアを媒介にした高齢者ケアの可能性を指摘するコメントもあった。最後は、こうした番組が京都以外ではできないのだろうかという早川医師からのNagoyaラジオカフェへの問いかけに答えるかたちでディスカッションが進められた。参加者からはその期待が強く語られる一方、制作者からは「できなくはないのだろうがパーソナリティを見つけ出す余裕がない」「聴取者を参加させることには過大な心配がありすぎる」といった、現代の放送業界をめぐる問題点も指摘された。またコミュニティFMの制作者からは、「本来コミュニティFMがこうした機能を担えるのではないか」といった感想も聞かれた。

■ 第四回 Nagoya ラジオカフェ「ラジオドラマ『堀川・サウンドストーリー』を聴く」

司会／解説：東海ラジオアナウンサー 源石和輝氏

日時：2016.12.14 19:00-

場所：名古屋大学理学部 Craig's Cafe

参加者：23名

第四回ラジオカフェは、2009年日本民間放送連盟賞ラジオエンターテインメント部門最優秀賞を受賞した『堀川・サウンドストーリー(55分)』を聴取し、番組をめぐるディスカッションを行った。ディスカッションの後、長くラジオドラマのナレーションを務めてきた源石氏から、一時間近いラジオドラマがどのように創られていくのか説明がなされるとともに、脚本家のインタビュー音源によって、名古屋城開府400年を記念した歴史ドラマというアイデアから、400年前に開削され、その歴史を眺めてきた堀川を中心にしたストーリー構成が想起されたこと、街中の石碑や書籍から細かな流れが構成されたことなどが報告された。また失われた音の作成がどのようになされたのか、名古屋弁が堪能な役者をどのように探したのかといった説明がなされ、その後は名古屋の放送と演劇との関わりや系譜についての議論が展開されることになった。

会場からは、ショートストーリーが続く構成がわかりにくいという意見も出されたが、失われつつある自然音を放送局が保存したり、再現したりしていく必要性や、ローカルな歴史を題材にしたドラマを図書館等にアーカイブしていく必要性などについても議論が展開された。

1. 地名が触発する記憶

地元の出身者からは、番組のなかになじみの地名が出てくるだけで懐かしさを感じたり、その場所のイメージが頭の中に広がったりするとの感想が語られ、付箋にも場所に関連する事象や思い出が次々と書き付けられていった。その一方、堀川近辺に縁のない参加者からは、地理的感覚がわからないために、堀川を下っていくという番組構成や、近辺に出てくる人びとや事象についてイメージがしにくかったという意見も出された。場所についての語りは、そこに行ったことや住んだことがある人びとの記憶を喚起する一方、その場所に縁のない人びとを排除しがちだとも言える。

2. 名古屋弁をめぐる議論

SEとともに、名古屋弁を聞かせることをメインとした構成に対しては基本的に好意的な評価が多かったものの、東海三県以外の出身者からは「普段の名古屋弁と違って難しい」「早口なので頭が追いつかない」といった意見が、一方、名古屋育ちの参加者からは、「東京のドラマと違い、名古屋人の名古屋弁なので自然」「忘れていた言葉、父母や親戚の言葉なのでなつかしい」といった意見、また「名古屋弁コンプレックスが刺激されてしまう」「改めて方言とは強すぎると聞きづらいもの」といった意見も聞かれた。いずれも、放送、とりわけドラマの世界において、関西弁以外の方言が使われることがきわめて少ない状況において、方言を用いることの是非について、応援とともに賛否両論が相次いだ。

3. 音の再現とアーカイブ

番組のなかにはさまざまな自然音や、チンドン屋や三味線など再現された音、わらべ歌や流行歌などが使われており、ラジオ局ならではの音へのこだわりが全体的に高く評価された。その一方で、貴重な音があくまでもドラマの背景となっており、もっと音自体をゆっくりと聞き、その世界を想像したかったという意見もあった。

学生からは、スタジオ録音を前提としたドラマにおいて、音の遠近感をどのように表現しているのか、チンドン屋などの音をどのように再現したのかといった質問も出された。源石氏からは、東海ラジオの以前の局舎には比較的広いラジオドラマ専用スタジオがあり、マイクからの距離でその遠近感を表現していたこと、スタジオに実際に来てもらって楽器などを持ち込んで再現されたこと、以前はさまざまな効果音を創り出すための道具があったことなどが紹介された。

写真と比べ、残りにくい音や話しことばをどのように後世に伝えていくのかといった点についても問題提起がなされ、ラジオ局がその役割を果たせるという意見とともに、賞レースに出品するだけでなく、図書館などで自由にラジオドラマが聞ける環境を整えていくことができないかといった意見も出された。



■ 第五回 Nagoya ラジオカフェ「ラジリオバトル」

司会:東海ラジオアナウンサー 源石和輝氏

日時:2017.7.13 19:00-

場所:名古屋大学全学教養北棟 215

参加者:13名

第5回ラジオカフェは、ラジリオバトルというかたちで、好きなラジオ番組の紹介とその理由について発表するという形式で行った。好きな本を持ち寄り、面白い点をアピールするプレゼンテーションを行い、

読んでみたくなかった本を投票して順位をつける「ビブリオバトル」のラジオ番組版として考案した。以下は、ノミネートされた番組/コーナーの一部。

Tokyo FM「あ、安部礼司」
TBSラジオ「伊集院光 深夜の馬鹿力「いつまでも絶えることなく友だちでいよう」
KBC 九州朝日放送「PAO〜N」芸能ニュースコーナー
毎日放送「辺境ラジオ」
RCC中国放送「平成ラヂオバラエティごぜん様さま」
PitchFM「高校生ラジオ」
毎日放送「報道するラジオ」
Date FM 浅野彰信さんの声
CBCラジオ「聞けば聞くほど」
TBSラジオ「安住紳一郎の日曜天国」
NPO法人 あまみFM デイ!「ヒマバン ミショシーナ」



他にも中国の長期的ストーリーテリング番組のポッドキャストなどが紹介された。

今回の研究会は、ラジオの新しい機能を活用してこそ可能になったものである。TBSが中心となって進めているラジオクラウド、それに何よりradikoのタイムフリー／エリアフリー機能、そして数々あるコミュニティFMのラジオ聴取アプリなどがここ数年で次々と始まったことにより、全国のラジオが身近なものになった。しかし逆に言えば、レベルの高い番組が地域を問わず話題になり、リスナーの要求も高まっていると言える。今回、ノミネートされた番組以外にも、参加者はたくさん候補を携えてやってきて、それぞれが熱く語りあって大変盛り上がった。なお、「第一回、勝手にラジオバトル最優秀賞」は、NPOラジオ局、奄美大島のデイFM、ヒマバンミショシーナが受賞。駄菓子屋を併設したこの局のスタジオには、子どもたちがふらりとやってきて学校のこと、夏休みのことなどを話していく。今回ノミネートされた番組の多くは、リスナーがどれだけ番組に参加できるのかがひとつの要因になっているように感じられた。ここでの関心は、第7回の研究会にあたるシンポジウムのテーマへの関心「フォーラム性」とつながる。



ラジオバトルの様子



参考)奄美デイFM 末広市場スタジオ 2016.8.25

■ 第六回 Nagoya ラジオカフェ@湘南ひらつかメディアフェス

『ラジオで考えるALS, ALSから考えるラジオ』

司会:名古屋大学大学院 情報学研究科 小川明子
登壇:東海ラジオアナウンサー 源石和輝氏
日時:2017.12.9 11:30-
場所:神奈川県 平塚市美術館 アトリエB
参加者:24名



今回の分科会は、主催者のひとり、小川による札幌の三角山放送局でのインタビュー調査から始まった。ここでは「しゃべりたい人だけがマイクの前に座る」をモットーに、逆に言えば、障害があっても、外国人でも、しゃべりたいひとたちを可能な限りボランティアパーソナリティとして受け入れている。なかでも感銘を受けたのが、月に一度、ALS(筋萎縮性側索硬化症)で寝たきりになった米沢和也氏も番組を持っていることである。彼は病院のベッドの上で、視線で文字入力をして原稿を作り、それをコンピューターに記録した自分の声と合成する(ボイスター:自分の残した声で伝達するシステム)。そしてできあがった音声ファイルを、こんどはスタジオで支援者が受けとめ、絶妙に合いの手を入れながら会話が進んでいく。そうまでして米沢さんが伝えたいこと、やりたいこととは何なのか。そこまで局が協力するのはなぜなのか。ALSというきわめて残酷な病を患う人びとのメディア発信には個人が個別にソーシャルメディアで発信するのとは異なる、まさに市民メディアの存立意義があるのではないかと感じたのだった。折しも、私たちが2年間開催してきたNagoyaラジオカフェの企画では、東海ラジオの源石和輝アナウンサーが、ALSを発症しながら前向きに発信を続ける元FC岐阜のオーナー、恩田聖敬氏のドキュメンタリーに関わられたと聞き、三角山の番組とともに聞いてみようということになったのだった。



東海ラジオドキュメンタリー

「LIFE IS BEAUTIFUL -ALSと共に生きるFC岐阜社長」(2015.12.27放送)

「前略 ALS様、私の残りの人生、あなたには渡せません」(2016.12.25放送)

上記2本を30分に編集した作品を聴取。番組は、ALSをめぐる知識と状況説明、そして恩田さんの声と静かなBGMで綴られる。ALSは、感覚は残り続けるものの、随意筋を徐々に動かせなくなる病気で、発症後数年で気管切開をし、人工呼吸器装着をしないと生き続けることができなくなる残酷な病気である。恩田氏は、「昨日まで当たり前でできたことができなくなる。」「想像してみてください。どれだけ頭がかゆくてもじっと耐えることしかできないやるせなさを。想像してみてください。自分の子どもを抱きしめることのできない悲しみを。」と語りかける。「食べることが自分の人生にとって最大の楽しみだったのに、ご飯粒が食べにくい。パンが食べられないので、自分にとってはないのと同じ。」「会社帰りにコンビニでアイスを買ってつまみ食した日々が恋しいです。」静かに日常を見つめ、伝えようとする彼の声は、聞き取りにくい部分を含みつつも、その状況の大変さを、私たちに対して力強く訴えかける。

ALS患者が置かれたコミュニケーションの問題に関しても彼は的確に状況を綴る。「文字は怒ってくれません。泣いてくれません。会話には即時性が必要なため、つい、おいていかれてしまう。手足が動かなくても、声が使えればコミュニケーションできるのに。残酷です。心はそのまま、思っていることがいっぱいある。」「コミュニケーションの身体機能を次々と奪われていくALSの経験。そしてそうした状況下にあっても、恩田さんは常に生きることに前向きで、社会を変えていくことも視野に入れて発信を続けておられる姿が描き出されている。

三角山放送局『声を失ってもラジオを続けたい -ALS患者のパーソナリティ米沢和也さんの挑戦』

続いて上記番組の15分版を視聴。米沢氏は「呼吸器をつけ、まぶたまで動かなくなった場合、何も相手に伝えることができない。そういう状態が怖い。要は誰も何も聞いてくれない。伝えられない。土に埋められた棺桶の中に一人ぽつんという、そういう恐ろしい恐怖にたぶん耐えられないんじゃないかと思う。でも最終的にはそういう状態になってしまう。」とその不安を静かに語る。しかし、当初、呼吸器をつけてまで人であるのだろうか、他人である妻にそれほど負担をかけられるのだろうかと気管切開に抵抗を示していた米沢氏も、支援者とともに番組を続



けるうちに、いつか医療が追いつくのではと人工呼吸器をつけ、コンピューターで合成した声「ボイスター 米沢さん」として番組を続ける決心をする。三角山放送局の田島美穂氏は、米沢氏のほかにも、視覚障害の方がキューを振動で理解するために局で制作した「ぶるぶるキュー」など、放送に関われるよう、局で開発した補助装置をいくつか見せて下さりながら、パーソナリティの多様性を重視した試みについて紹介された。

1) 音声で想像するALSの世界

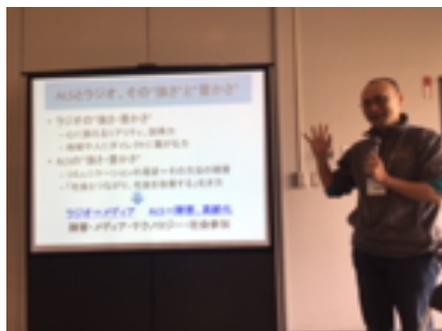
参加者間では、グループごとに上記2番組についての意見交換を行った。恩田氏や米沢氏の問いかけに対し、多くの参加者が「自分だったら」と想像したと述べている。さらに、両氏の置かれた状況をめぐる描写がきわめて具体的であるうえに、音声、ことばのみで伝えられるがゆえに、その状況を各自の頭の中に描き出し、その恐怖や戸惑いを追体験したことが多く指摘されていた。

2) 表現することと生きること

社会や福祉に対する考え方、気管切開に関する考え方には同じALSであっても個人差が見られるが、恩田氏、米沢氏に共通することとして、コミュニケーション手段が病気によって徐々に奪われ、身近な家族とのコミュニケーションが不可能になっていくなか、絶望ともいえる感覚を抱きながらことばを紡ぎ出していることが挙げられる。気管切開を拒否していた米沢氏が、それを受け入れることを決断した背景にも、ボイスターやラジオを通して人びととつながっている感覚、メディアを介してコミュニケーションができるのだと感ぜられることが影響しているのではないかという感想も聞かれた。ALSを抱えたふたりの表現への欲求は、究極にコミュニケーションが閉ざされ(ることが予想される)た状況から生まれた側面もあるのかもしれない。

3) アシティブ・テクノロジーと同居する未来

最後にコメンテーターとして、障害とメディア、テクノロジーを専門とされる津田塾大学の柴田邦臣氏から、ALSの彼らの声は、進行性の難病としてだけ捉えるのではなく、障害を持つ人の声全般、あるいは高齢者の声を代弁していると考えられるのではないかと問題提起がなされた。



以前、柴田氏がボランティアで携わっていた支援活動では、筋ジストロフィーの中学生女子が初めて携帯電話でコミュニケーションをするとき、最初に書き込んだのが顔文字であったという例が紹介された。あるいはALS患者のコンピューター使用においては、ご本人や家族、ボランティアなどが相談するなかから、プリコラージュ的に個人に最適なメディアが作られていく事例があることなどが紹介された。このように、とりわけALS患者は、コンピューターを単なる意思伝達手段として捉えるのではなく、積極的に、テレビやラジオ、インターネットというメディア利用の媒介として使ったり、自分自身がメディア発信をしたいという意思が強いという調査結果があるなど、コミュニケーションや社会参加への渴望があると指摘された。そしてさらに、本来、いわゆる一般的な障害者も、生まれつきであった場合、そうした自由な情報収集という経験をされてこなかっただけで、本質的には同様の欲望を持っておられるのではないかと指摘された。

同様に、柴田氏は、高齢社会においては、誰もがアシティブ・テクノロジーのお世話になる時代になるのであり、しかしこうしたアシティブ・テクノロジーと併存する未来に、私たちがどう生きていくのかという意味は十分考えられていないのではないかと提起され、ラジオで取り上げられたお二人の「伝える」姿が、それを考えさせてくれるのではないかと締めくくられた。

■ 第七回 ラジオカフェ 最終シンポジウム『ラジオとフォーラムーその過去・現在・未来』

司会: 東海学園大学人文学部 北出真紀恵

登壇: CBCラジオディレクター 加藤正史氏

(聞き手) 東海ラジオアナウンサー 源石和輝氏

TBSラジオプロデューサー 橋本正史氏

CBCラジオプロデューサー 菅野光太郎氏

成蹊大学文学部 伊藤昌亮氏

名古屋大学大学院情報学研究科 小川明子

日時: 2018.1.28 13:30-

場所: 名古屋大学東山キャンパス 野依学術記念交流館

参加者: 47名(ラジオ関係者16名, アカデミズム 13名, メディア関係者+一般参加者18名)

1) 問題意識

昨今、ネットを介したコミュニケーションにおいて、「エコーチェンバー」「フィルター・バブル(パリザー, 2016)」など、検索エンジンやソーシャルメディア上のアルゴリズムによって情報が統制されるため、関心や意見を同じくする人びとやものごとだけに囲まれ、異なる情報や環境から遮断されがちになることが問題視されている。さらに、サンステーションは、心理学の知見を踏まえ、そうしたグループ内ではもともとの方向の延長線上にある極端な意見へとシフトしていく可能性が大きい(集団分極化)と論じている(サンステーション, 2003)。

こうした分断は、ネット上だけに留まるわけではない。一方で、湯浅誠(2015)は、「マスメディアの言うことは一切信用できない」とする人びとと、そうした人びとの奥にある不安を汲み取ろうとしないマスメディアの間にも、相互不信にもとづく分極化が存在すると指摘している(湯浅, 2015:20)。林香里も同様に、世界の「メディア不信」状況を分析しながら、「リベラルな民主主義が、結果として社会の経済格差を広げ、一般の人びとの平穏な日常生活にグローバリゼーションという荒波を送った。社会の変化を一方向的に押しつけられて、「下」が「上」の独善的な態度や既得権益、硬直した官僚制等に対して不満と不安を募らせていった(林, 2017:203-205)として、ドイツを例に、マス・メディアが共有していた、いわば「リベラル・コンセンサス(ハーバーマス/三島, 1987=1995.ドイツにおいてナチスの過去をお克服し、自由社会の希求とリベラル左派の思想を尊重するエリート層の合意(前掲:32-33)」にゆらぎが生まれていると指摘している。

比較的「マイナー」なマス・メディアであり、パーソナリティやリスナー間に親密性が指摘されるラジオにも、そうした影響が到達しつつあるように見える。たとえば、今回、対象とした番組『聞けば聞くほど』にも左右さまざまな立場から多様な意見が寄せられてきたが、最近、番組内で、多様な意見を紹介しようとするパーソナリティの立場自体を「偏向」と断罪する過激な批判も紹介されるようになった。「パーソナリティ」という、いわば座回し役自体が一切信用できないと過激に批判されるという根源的な分断状況に置かれうる。

2) 目的

そこで、最終回の目的は、これまで中心としてきた周縁に光を当てるドキュメンタリー聴取から少し離れ、ラジオが築いてきた「フォーラム(ここでは、多様な立場の人びとによる公開討論や交流の広場、と設定しておく)性」について考察することとした(参考:年表1)。戦後、GHQの介入を経てでき上がった参加型かつ民主的なラジオ番組のルーツや、60年代、テレビにメディアの王座を奪われたのちのワイド化において、ラジオが聴取者の参加性が高いメディアとして発展してきたことを踏まえ、本シンポジウムでは、多くの人びとが意見を述べ合ったり、一緒に遊んだりすることのできるラジオ的「フォーラム」が、いかにラジオの送り手やパーソナリティによって「デザイン」されてきたのか/しようとしているのかを分析し、それをフィルターバブルやエコーチェンバーと言われるネットを媒介とした分断の時代に、いかに生かせるのかという道筋を示しだすことを目的としている。

(なお、ここでの「デザイン」とは、たとえば「語りの技法」や「語りの作法」(加藤晴明, 2009:13-14)、メッセージの選ばれ方(小川博司, 2009:42-43)、話題の選び方(たとえば、小さな、個人的なエピソードの重視(藤竹暁, 2009:74)), 参加の際の匿名性やラジオネーム(杉本哲哉, 2017:6)などの採用や配置を指す。)

2) サンプル番組の聴取

まず、CBCラジオ『聞けば聞くほど』から東京ディズニーランドでの労災認定のニュースと”me, too”についてのコーナー、そしてラジオクラウドからTBS『ジェーン・スー生活は踊る』の相談コーナー(2018.1.26)、そして『ライムスター宇多丸のウィークエンドシャッフル』から「低み」コーナー(2017.9.9)を共同で聴取し、担当プロデューサー、ディレクターへの質問を書き入れた。『聞けば聞くほど』に関しては、ディズニーのキャラクターをめぐるユニークなやり取りを通じて、私たちの日常とニュースとが接続していく様子や日に500通集まるというリスナーからのコメントがどのように番組に使われていくのか、そしてme,tooの話題に関しては、パートナーである小高直子アナウンサーが的確に軌道修正をしたり、情報を補足したりする様子うかがえた。またジェーン・スーの相談コーナーに関しては、自閉症の子どもを持つ男性のお悩みに対して多くのリスナーから反応が来る様子、そして、それに対して、スー氏や堀井美香アナウンサーが、現在の、また40代女性の視点からさまざまな立場の人びとに配慮しながらアドバイスを行う様子うかがえた。「低み」は、「誰にも迷惑をかけていない。犯罪でもなければマナー違反とも言えるかどうかもわからない。ただし、確実に何か低い」とみなされる意識の低い微妙な行為について、パーソナリティが面白おかしく判断の基準を多様に呈示し、その「低さ」について議論する様子が見られた。この間に、参加者からは、番組を担当する登壇者への質問が書き込まれた。

3)「聞けば聞くほど 25年の歴史」

続いて、CBCラジオで人気番組『聞けば聞くほど』を25年担当していらした加藤正史ディレクターに、東海ラジオの源石和輝アナウンサーがインタビューをするというかたちで、どのように多くのリスナーが意見を交わすフォーラムを形成しているのかをうかがった。番組開始当初は、深夜番組で下ネタをベースにした「放送禁止歌」を歌っているつボイノリオ氏を朝のパーソナリティに据えることに関して、上層部から抵抗もあったこと。しかし家庭用ファックスの普及時期と重なり、その日のニュースに対するリスナーの意見を生で聞ける参加型のスタイルがつボイ氏の期待どおりうまく定着した。そして市井のリスナー(つボイ氏いわく500人の構成作家)たちが、自分の仕事や趣味の領域で、それぞれの話題について、ニュースやネットなどでは簡単にはわからないような専門的な知識や意見をすぐに番組に提供してくれたこと、そのファックスをすべて保存し、何十年経っても紹介するつボイ氏のスタイルなどが結果としてうまく作用したとお話いただいた。また、つボイ氏は、本当に気に入らないなら無視すれば良いのに、わざわざ意見を送ってくるとして、あえて自分たちに批判的な過激な意見も紹介していること。またスタジオのデザインについても、公開放送型の通りに面したスタジオ(リスナーには向き合うが、話し手同士は向き合わない)ではなく、パートナーと互いに向き合いながら話ができる奥まったスタジオであったことが結果として良かったのではないかと分析された。また



wikipediaをひきながら、この番組が、小高直子アナウンサーとの2人の番組であることがきちんとリスナーに評価されていることの意義、また彼女の功績についても指摘された。

4)「ラジオの強みとは何か」

続いて、TBSラジオのプロデューサー、橋本吉史氏から、「ラジオの強みとは何か」というタイトルで、今、ラジオに求められていることの分析をプレゼンテーションしていただいた。橋本氏は、ライムスター宇多丸氏や、ジェーン・スー氏といった当時ほとんど世の中に知られていなかった才能を見つけ出し、番組に登用し、それが多くの新しいリスナーを獲得した人物である。また同時に、TBSラジオクラウドなどのスマートフォン対応のアプリケーションを開発し、全国のラジオとスマートフォンをつなげる試みを始めたプロデューサーでもある。

橋本氏は、二人に出会ったときのこと、毒蝮三太夫氏の一言一言を丁寧に紹介しながら、ラジオパーソナリティには、みんながなんとなく心の中で思うようなこと、疑っているようなことをずばりと言える「正直さ」が求められているのではないかと分析された。そして支持されるパーソナリティは、話し方が流暢であることよりも、突発的な出来事やコメントに対して的確な瞬発力があること、そしてそれをうまくエンターテインメントにする力が必要なのではないかと分析された。さらに、スマートスピーカーを初め、radikoやラジオクラウドなど、ネットとの連動で、今、これまでになくラジオに関心が向けられていること。ゆえにその時代にうまくその価値をアピールしていく必要があるとも提起された。そのとき、ラジオはサブカルチャーの領域で、新たな流行の種となる話題を見つけだし、それを芽吹かせるうえでまだ十分力を持っていること。また、たとえばコーナーとして人気の「低み」、「KO-KO-U(孤高)。一人であることの新たな価値付け」などの例を挙げ、新しい概念を呈示してみせることによって、ラジオは日常における新しい考え方、視点を呈示することができるメディアである(HipHop的!)との見方も示された。



4)「決断主義と多元主義」「カーニバルの笑い」「マスメディア未満インターネット以上」

続いて、コメンテーターの伊藤昌亮氏からは、「フォーラム」という概念がもともとはローマの広場における公開討論や商売にルーツを持ち、インターネットの時代には、パソコン通信、あるいは一方で東欧革命などでは市民的理念を結実させるような場の概念として90年代に用いられていたものの、現在では主流派マスメディアが掲げるリベラル・コンセンサスに対して不満を募らせる草の根保守やネット右派が台頭する場になっているとその経緯が説明された。そしてラジオ制作者のプレゼンテーションを受け、ラジオのパーソナリティのスタンスには、心の中で誰もが思っていることを断言したり、世の中に対して切り込んでいくような発言ができること(決断主義)と同時に、そうはいつでも多様な見方が存在することを理解し、ものごとの両義性に気づけること(多元主義)の両方が求められているのではないかと、そしてそのバランスが重要なのだろうと提起された。



伊藤氏はさらに、ミハエル・バフチンの「グロテスクリアリズム」「カーニバルの笑い」の概念をひきながら、聴取した人気番組の「フォーラム」形成に、真面目な話題だけでなく、下ネタや毒舌、正直さや食、性といった、人間的な笑いが含まれていることに着目し、こうした笑いが、権力を「引き落とし」、その場にいるものをもとに笑わせ(誰かをターゲットにして嗤うのではなく)、日常の硬直したシステムや自己批判へと向かわせる可能性があるのではないかと提起された。そして「マ

メディア未満インターネット以上(加藤,2009:13)」としてラジオが築いてきた「カーニバルの笑い」を媒介としたフォーラムは、弱者を攻撃しがちな分断の現代にこそ、改めて求められているのではないかと整理された。

5) ディスカッション

続くディスカッションでは、ラジオ営業に関わっている方からの質問として、こうしたフォーラムを支えていく上で必須のスポンサーとの関係をいかに築いていくことができるのか、制作側からの意見が求められた。CBCラジオの菅野光太郎氏からは、担当番組のパーソナリティ北野誠氏が、営業の人とも飲みながらその想いを交わし合い、そうした意図をスポンサーに伝えてもらうしくみが作られていること、また加藤氏からは、たとえばラジオショッピングなどでは、パーソナリティへの信頼が営業とつながっていることなどが紹介された。

また、昨今のいわゆる「政治的圧力」は実際現場ではどうなのか、あるいは対抗勢力からの激しいバッシングは業界内にどう影響しているのかといった点についても質問があり、橋本氏は「政治的圧力に対する「自粛」というよりも、こういう時代なので、足元をすくわれないよう、事実確認をきちんとするといったポジティブなかたちで影響が出ていることは確か」と答えられた。

最後に、「me,too」の動きや最近話題になった「黒塗り」を例に、「常識」やポリティカル・コレク

トネス(政治的正しさ)が移り変わるなかで、パーソナリティがどのように人びとを引き付ける決断主義と多元主義とを両立させていけるのかといった点に焦点が当てられた。パーソナリティにはそのエッジを見極めていく性質が不可欠であるが、高齢化したりしてその常識がずれてくることもある。それに対し、つボイノリオ氏と小高直子アナ、ジェーン・スー氏と毒蝮三太夫氏のようにどちらかが互いに修正しあってバランスをとっていくやり方があるということが指摘される一方、(TBSやCBCといったリベラルを自負するラジオにおいては、少なくとも)ラジオパーソナリティには弱者の立場を理解する心性が最も必要であり、それがあれば、多少、現代のコレクトネスからずれたとしても、誰かに指摘されたときに新しい考え方に柔軟に対応できるという点でパネリストの意見が一致しているように見受けられた。

またその後の懇親会にもほとんどの参加者がそのまま残り、ラジオをめぐる熱い議論が交わされ、ラジオカフェの最後らしい締めくくりとなった。



4. 送り手と受け手双方のより豊かなメディア・リテラシーのために

以上がラジオカフェ7回の記録である。ここに記録されていることの分析は、別稿で研究として結実させていくとして、名古屋開催の研究会には、東海地方の民放ラジオ局、コミュニティFM局、あるいはテレビやインターネットなどの送り手たちが局の垣根を越えて多数参加した。本報告を閉じるにあたって、送り手であるラジオ制作側が研究会をどのように受け止めたのか、世話人二名の四回までの振り返りから、共通する三点を記しておきたい。

一点目は、研究者、一般聴取者、放送局の垣根を越えての多彩な顔ぶれによる研究会が画期的であったという評価である。とりわけ、現在ではパーソナルなメディアとして聴取されているラジオ番組を、見ず知らずの他者と聴き、互いに批評するという機会自体が、より多彩な聴取者の意見を取り入れる上で画期的と感じられたようだ。中学生から高齢者まで、ここで交わされる多様な聴き手からの意見は、いわばファンである聴取者から



寄せられる感想や反響と異なるタイプの率直な意見や批評であり、それに「驚きと発見」を得、「日頃の制作活動にフィードバック」されたと述べている。具体的には、ラジオは聴取者にある程度の想像力を要求するが、ラジオカフェでのコメントから、聴取した人びとが送り手の予想以上に想像力を働かせて視聴していたこと、あるいは送り手の予想より、実際には想像しづらかった人がいたことに驚き、今後、より多くの人々が想像しやすいものを作るにはどうしたらいいのかを考えているという。さらに、PR(番組宣伝)不足にどう対応していくのかという問題意識を生み出した。このように、普段の聴取者以外の人びとの反応に触れることは、従来の番組聴取者以外の人びとを聴取者として取り込んでいくために必要な要素を見つけだそうとする視点をもたらした可能性がある。

二点目に注目されるのは、担当した番組や関わるラジオ全体について聴取者からの率直な意見を聴くことで送り手側にある種の肯定感が生まれていると思われる点である。たとえば「このラジオ番組をもっといろんな人に聞いてもらいたい／もったいない／こういうものがあると知れば聴く人が増える」といった意見は(送り手側にとって)素直に嬉しく、ラジオのメディアとしての力が廃れていないという自信にもつながった」という。あるいは、「正直報われないことばかり」というドキュメンタリー制作の地味な作業を続けるなかで、作品を多くの人に聞いてもらい、感想が直接伝えられるというのは「人間だから、報われない、という欲求を満たしてくれる場」でもあったという。しかし同時に、「コンクールでもないのに批判や批評をわざわざ自ら浴びに行く」という点において、作品を公開することが一方で「勇気がいるし気まぐずい」ことでもあったという指摘も興味深い。そこには放送というメディアが本質的に持つ一方向性が見えてくる。



三点目に、番組の作品化やアーカイブに関する関心が高まったと答えられている点である。作品を改めて聞く機会は、「送りっ放し」と揶揄される状況を批判的に見直し、番組を作品としてとらえ、それをアーカイブとして意識する視点を必然的にもたらした。さらにそれは番組だけでなく、ことばや歌など地域に残る音声の伝承などについてもあてはまることに改めて気づいたという指摘もあった。あるいは、先にも述べたように、番組を聞いてもらうための工夫や、作品としてSNSなどを通して広げていく可能性を考えていきたいといった意見にもつながる。

Nagoyaラジオカフェは、送り手、受け手双方に必要とされる音声のメディア・リテラシーとは何かを探ることを目的として企図された。本研究会で対象とした番組の多くは、いずれも高い聴取率を取るものではない「周縁の声」であったが、参加者たちは、そういったジャンルの番組に初めて出会い、多様な受け止め方があることを学ぶこととなった。また、送り手との対話は、音声でだからこそ表現できる音声メディアの意義を再考する契機ともなった。一方、送り手たちにとっても、自分たちが「送り、放っている」番組がどのように聴かれるのかを「驚きと発見」を持って知る機会となったのだといえる。



※ この報告は、小川明子・北出真紀恵(2017)「研究実践報告:送り手と受け手の対話空間を創る-Nagoyaラジオカフェの試み」(名古屋大学大学院国際言語文化研究科「メディアと社会」9号, p.1-18)に、第5回、6回分の記録を加え、修正したものである。なお、本研究会はJSPS科研費 15k00464の助成を受けている。

シンポジウム当日資料 議論のための補助線

背景／問題意識

エコーチェンバー

(特にネットのコミュニティ、ソーシャルメディアなどにおいて)同じような意見に囲まれ、反論を目にしなくなる状況。

フィルターバブル

バイラルメディア「アップワージー」CEO イーライパリサーによる用語。特にFacebookやGoogleが情報をパーソナル化するためにフィルターにかけて呈示することで、ユーザーが自分の関心にあうもの、意見だけに囲まれ、異なる情報や環境から遮断されてしまう状態。

集団分極化

もともとは心理学の用語。グループで議論をすれば、メンバーはもともとの方向の延長線上にある極端な立場へとシフトする可能性が大きい。インターネットや新しい情報通信テクノロジーに照らし合わせてみれば、同じような考え方の人間が集まって議論をすれば、前から考えていたことをもっと過激なかたちで考えるようになる(サンスティーン,2003)。

マスメディアをめぐる分極化 湯浅誠 (2015)

一方に「マスメディアの言うことは一切信用できない」とマスメディアの情報を否定する言説を、マスメディア情報を否定しているから信用できるに違いないとばかりに無批判に信頼・拡散する人たちがいる。他方に「つきあいきれない」とばかりに、その奥にある不安を汲み取ろうとしなくなるマスメディアがある。これは、相互不信にもとづく分極化であり、マスメディアとネットメディアが築くべき建設的な緊張・補完関係による社会の成熟からもっとも遠いものだ(湯浅誠,2015:20)。

リベラルな民主主義への異議申し立てとリベラル・コンセンサスのゆらぎ 林香里(2017)

「リベラルな民主主義」への異議申し立て

リベラルな民主主義が結果として社会の経済格差を広げ、一般の人びとの平穏な日常生活にグローバルゼーションという荒波を送った。社会の変化を一方向的に押しつけられて、「下」が「上」の独善的な態度や既得権益、硬直した官僚制等に対して不満と不安を募らせていった(林,2017:203-205)

※「リベラル・コンセンサス(ハーバースマス／三島,1987=1995)」(ドイツにおいてナチスの過去を克服し、自由社会の希求とリベラル左派の思想を尊重するエリート層の合意(前掲:32-33))のゆらぎ。

ラジオをめぐる言説

1.ラジオの性質

■ マクルーハン(1964=1987)

送り手—受け手の暗黙の意思疎通

ラジオは大多数の人びとに親密な一対一の関係をもたらす、著者=話し手と聞き手との間に暗黙の意思疎通の世界をつくり出す。これはラジオの直接的な側面である(マクルーハン,1964=1987:311)。

部族の太鼓

もう一つ、ラジオが識域下の深層に働きかけるとき、そこには部族の角笛や古代の太鼓が反響し合う世界が生み出される。これは、ラジオ・メディアの本質そのものに本来的であって、人の心と社会とをまったく一つの共鳴室(echo chamber)に変えてしまう(マクルーハン,1964=1987:311)。

2.フォーラムのデザイン



パブリックとパーソナルの間

ラジオがもたらす、パーソナリティの語りとリスナーとの関係には、マスコミ未満インターネット以上の位置をもつ領域が存在しているように思われる(加藤,2009:13)。

語りの技法,語りの作法

そこにはパーソナルでありながらパブリックでもある,パブリックでありながらパーソナルでもあるという両義的であるような語りの技法,語りの作法が存在している。その語りの技法・語りの作法には,インターネットという私的表出の暴走と自己の肥大が際限なく展開されるメディア空間への,ある種のオルタナティブなメディア表現のモデルを呈示する可能性があると言ったら期待しすぎだろうか。公共放送空間における”声”と”語り”は,パブリック・トークであることでの抑制をともなっている。その点ではラジオ的なコミュニケーションは,インターネット世界の言語表現に見られる一方的な自己語りと承認メッセージの調達欲求とは異なる(加藤,2009:13-14)。

■ 北出真紀恵(2009)

「規格化されたことば」から個人的な「ことば」へ

(1960年代)ラジオルネサンスは,”声“が発する「ことば」を,規格化された「ことば」から個人的な「ことば」へと変容させた(北出,2009:62)。

※「土居まさる」のタメ口話法誕生がラジオの話法の大きな革命?

■ (2009)

メッセージの選ばれ方

(ラジオ)番組内容はアクティブな聴取者の投稿の数と質に依存している。そして,番組の存立は聴いているだけの聴取者の数に依拠しているのである。アクティブな聴取者から番組のパーソナリティへ,番組のパーソナリティから聴取者へという流れの勢いが強ければ,通りすがりの潜在的聴取者をも巻き込んで,この「参加型コミュニケーション」は活性化する(小川,2009:42)。

(中略)ラジオにおいては,投稿がパーソナリティの声により紹介されるということである。パーソナリティは単なる司会者ではない。テーマを設定しメッセージを選ぶのは番組スタッフもしくはパーソナリティ,あるいは両者の協同作業である。(中略)この点においてラジオは,原則として書き込まれた内容は全員の文が掲載されるインターネットのBBSやブログとは異なる。テーマの選び方,聴取者からのメッセージの選び方,メッセージの紹介の仕方に番組の個性が出る。これは「家元」が絶対的な力をもつ「家元制」のコミュニケーション構造に似ている。毎日放送の長寿番組『ありがとう浜村淳です(1974-)』『つボイノリオの聴けば聞くほど(1993-)』の人気は「家元」の個性によるところが大きい(中略)(同上:43)。

■ 藤竹暁(2009)

小さな,個人的なエピソード

深夜放送では,ラジオパーソナリティの語りかけが,リスナーの感動の呼び水となり,そしてリスナー間の連帯を生み出していた。ラジオとリスナーが交わし合った関係を,現代のラジオはどうすれば,再び蘇らせることができるのか(藤竹,2009:65)。われわれはラジオに聴き入るのだが,しかしそれは,かつてラジオ番組を丸ごと傾聴したスタイルとは異なっている。現代ではラジオから断片的な声や音を選び出し,それを自分の人生経験に滑り込ませて,瞬間的に”傾聴”し,想像力の翼を広げるのである(同上:68)。ラジオで語られるのは,原則論であるよりも,小さな,個人的なエピソードに引き付けて,

語り手の人生のひと駒として語られることのほうが、リスナーの耳に入りやすい。それは人生の問題であるために、リスナーに対して強いインパクトを与える(同上:74)。

ラジオネームという匿名性 (杉本哲哉 グライダーアソシエイツ 代表取締役社長)

実名であることに意味がある人はよくよく考えて、実名で何か意見を発表したりとか、企画を出したりとかを昔からしていたんだと思います。その中で、なぜハンドルネームが生まれたのかとか、はがき職人が投稿するときは何でペンネームだったのかなと考えていたのですが、結局その方がより裸になれるというか、本音を言えたんだらうなと思います。私もペンネームではがきを出していましたから。

マスメディアもテレビ、新聞、ラジオ、雑誌とありますが、雑誌とラジオは匿名で読者やリスナーが意見を寄せるコーナーとか場所がありましたよね。新聞は投書欄がありましたけれど、テレビはこうしたものを重視してこなかったしそういう場もなかった。誤解を恐れずに言えば、雑誌やラジオの匿名文化を私は大切にしたいほうがいいと思っています。意見を言う時に全員が実名を名乗らなければいけないのは、かえって息苦しいのではないのでしょうか(月刊民放,2017.2:6)。

3. ラジオ, ソーシャルメディアと若者

■ 齋藤建作・古閑忠通(2015)

NHK放送文化研究所「もしラジオ未利用者が一週間ラジオを聴き続けたら」調査

2015.2.2-8 現在ラジオを聴く習慣がない一都三県在住の15-49歳の男女996名

1日合計30分以上,合計3日以上聴取すること。

→ 今後も聞きたいか「聞きたい」94%

→ (2週間後) 聞いたか 75%

減少した時間: テレビを見る時間(29%), 暇をもてあますこと(13%), 音楽を聴く時間(10%), ネットやSNS(8%)

→ 聞けば聞くほど楽しくなる傾向

→ ネット経由のラジオが使いやすい

→ 「とても楽しかった」は10代が一番高い(35%)。

■ 調査票から(抜粋)

- ・ テレビのトークだと出演者同士が話している感じだが、ラジオだとこちらに語りかけてくれるような感じなのですごく新鮮に感じた(男性36歳)。
- ・ 画面がないとかえって楽。画面を見なくていいので自由度が上がる。「あの画面見逃した、くそー!」というのがない(女性27歳)。
- ・ スマホやパソコンは目を使っていて疲れる。ラジオだと目を使わないで情報が入ってくるので目に優しくいい(男性36歳)
- ・ 70年代とか80年代の山口百恵とか中森明菜とかのアイドル系を今回のラジオをきっかけに好きになった(男性28歳)
- ・ 自分で選んだものじゃない情報が入ってくるのが脳に刺激があってよかった(男性36歳)
- ・ テレビの番組表で録画できるように、ラジオも簡単に予約録音できたらいい(女性22歳)
- ・ ただでさえいろいろなアプリを入れているので電池がなくなりやすいのに、もう一個増えると(radiko)電池がなくなると不安(男性28歳)
- ・ パケット通信をどれくらい使っているんだろうかと若干心配になった(男性28歳)
- ・ 鉄筋マンション、なぜ携帯の電波は通っているのにラジオの電波はダメなのか(男性32歳)

- 音楽がズーッと心地よく流れているのがないかな、とザッピング。話したすとうっとうしいので変えちゃう(男性48歳)
- 周りで聴いている人がいない。話も共有できない。テレビなら「この番組面白いよ」という話になるのに。ひとりで盛り上がっていてもしょうがない。自己完結(女性26歳)
- 自分だけラジオを聴いている感じだった(男性28歳)

「グチれない若者」(中国放送『ラジプリズム』ディレクター黒元敬太)

「『グチれ』というテーマでメッセージを募集したとき、スタッフが想定していたような投稿が来なかったんです。そのとき、今の時代、本当に悩みを抱えている子はなにもいえないのかもしれないと感じて。いえる人は個人でツイッターのアカウントを作ってつぶやくと思ったんです。」(豊田,2017:41)

「ひとりコンプライアンス遵守」

(若者番組の何が難しいかと問われて)「距離感ですね。最初はパーソナリティと楽しそうに話していても、何かちょっと踏み込むと、ぴしゃっとそこで心のシャッターが下りてしまうのです。(南日本放送『てげてげハイスクール』ディレクター立和名梨絵)」その何か、ここまではOKというのがなかなか難しいと言う。恐らく、今の若者たちにはSNSなどのコミュニケーションが増えた分、その場その場でのルールがありすぎるのだろう。まるで「ひとりコンプライアンス遵守」状態である。おそらく友だちのプライバシーを侵害することは、自分の所在がバレること、そしてもっと恐ろしいことに自分の「本音」に触れられそうになるとぴしゃっと閉じてしまうと言う現象が起こっているのだと思う(森,2017:37)。

1920 米ピッツバーグで KDKA局開局	
1922 英BBCラジオ放送 開始	
1925 AKBKCK, 東名阪 に開局	
1926 社団法人日本放 送協会に統合	1928ラジオ体操開始
1931 満州事変	1936 ベルリン五輪 前畑ガンバレ
1938 国家総動員法	1938 オーソンウェルズ『宇宙戦争』放送 ← 生中継を真似たSF番組でパニック?
1941 太平洋戦争開戦 大本営発表へ	
1945 敗戦,GHQ ラジオ コード指令	1946 NHK「街頭録音」放送開始 -58 ←GHQ指導と監督の下、民主化のため国民 の声を積極的に取り入れた新しい番組。収録 には大勢の人が集まり,市井の意見を聴いた。 1946 NHKのど自慢素人音楽大会 ←誰もが 参加可能なスタイル 1952 ラジオ神戸 初めての電リク? (wikipedia情報)
1951 民間放送開始 CBC,TBS開局 ←広告放 送かつ「民衆の放送」 59年末までに38局開 局。	1947 NHK日曜娯楽版(-52) ←世相や混 迷する政治をコントと音楽で鋭く風刺した番 組。当時の人々の思いを代弁したことで人気 を呼んだが,政治的圧力を受け「ユーモア劇 場」へ。
1957 NHKFM開始	55年当時 ラジオセットインユース 40% ←ス イッチが入っている受信機台数割合
1959 皇太子ご成婚 テレ ビ普及へ	1960 東海ラジオ開局
1964 東京オリンピック	1964 TBS昼ワイド『オーナー』←テレビ人気 に押され,制作費減少からラジオはワイド化 へ。一社スポンサーから小口スポンサーを集 めたスポット広告へ(花輪,2008:40)。コー ナーのひとつ『全国こども電話相談室』は子ども たちが誰でも参加できる番組として人気に。
1966『FMファン』創刊	1966 ABC『ヤングリクエスト』←葉書による リクエストを中心とした深夜番組。1968年の 聴取率は6%。1967 MBS『ヤングタウン』と ならぶ伝説的若者向け番組。
	1967 LF『オールナイトニッポン』, TBS『パッ クインミュージック』←お題参加番組。
	1968 東海ラジオ『ミッドナイト東海』 ←東海 地方の人気深夜番組。

	1969 QR『セイ!ヤング』
	1970 CBC レインボースタジオ開設 ←『ぼつぐんジョッキー』 東海ラジオ 日産ギャラリーサテライトスタジオ開設← 公開スタジオ。
	1977 ABC『おはようパーソナリティ 道上洋三です』 1978 ラジオ大阪『ぬかるみの世界』←関西で鶴瓶と放送作家新野氏が延々としゃべる深夜番組。番組で呼びかけたリスナー集会には想像以上の5000人が集まった。
1987 ニフティサーブ開始 ←パソコン通信サービス	1982 CBC『小堀勝啓のわ!ワイド』←東海地方の人気深夜番組。 1986 TBS『大沢悠里のゆうゆうワイド』 1987 京都放送『早川一光の人間ばんざい』
	1990 NHK『ラジオ深夜便』←1989年11月の3連休に放送した特別放送で、普段メンテナンスに当てる深夜時間帯に音楽や落語等を放送したところ中高年層から「大人が聴ける静かな番組」として支持され「ラジオ深夜便」誕生に繋がった。深夜時間帯の地震や津波・突発的なニュースが発生した時に迅速な対応をする目的も。
1992 コミュニティFM誕生 ←市町村レベルのラジオ局の誕生。地域密着や市民参加,防災を掲げて次々開局。2018.1現在,315局が開局。	1993 ZIPFM開局 ←1988年開局のJ-waveをはじめ,このころ FMの「シーンメイキング」的聞き方に注目が集まる。
1994 プレイステーション発売	1993 CBC『つボイノリオの聞けば聞くほど』←東海地方の人気朝番組。「物静かな話しぶりや知識の深さからは聡明さと,お利口な人が生まれついて持っている危険に対する敏感さなどが感じられた。そんなわけだから遠巻きで冷静に見つめるだけで,わずかでも危険が及びそうになると上手に尻込みをするようなタイプと思えた。とてもその手の歌ばかりを狙って歌うようなド口臭いことをする人物には見えなかった。どっちがほんとうの顔なのか。人間は謎だ。(花輪,2008:77)」
1995 阪神大震災 地下鉄サリン事件	
1995 ウィンドウズ95発売	1997 東海ラジオ『宮地佑紀生の聞いてみや〜ち』
1999 2ちゃんねる開始	1998 TBS『Battle Talk Radio アクセス』←番組開始前に放送当日のニュースを10本ピックアップし,番組の登録会員が投票。番組開始当初はFAX会員のみだったが,その後インターネットからも参加できるように。
1992-2005 FAX普及 1998-2005 パソコン普及 2000 移動体通信が固定電話を超える	

2004 ミクシイ開始	
2005 Podcast開始	
2005 ライブドア敵対的買収事件	2005 Tokyo FM『School of Lock!』←「未来の鍵を握るラジオの中の学校」をコンセプトにしたラジオ番組。2006年、第3回日本放送文化大賞 ラジオ番組グランプリ 他
2006 Twitter開始 ← SNSの時代にはタイムラインを見ているだけで、番組で採用されなかった投稿も、あらゆる人が放送時間に関係なく閲覧可能(入江,2017:12)。	2006 Tokyo FM『あ,安部礼司 Beyond the Average』← ごくごく普通のサラリーマンを主人公にしたラジオドラマ。スポンサーの日産とのイベント,メディアミックスも多い。
2008 Facebook 日本で開始	2008 NHK『ラジオビタミン』
2008 iPhone日本発売	2008 NHK『私も一言!夕方ニュース』←リスナー参加型ニュース番組
2010 放送法改正 ←コミュニティ放送基幹放送化	2010 Radiko開始 ←2010年4月よりサービス開始したIPサイマルラジオサービス
2011 Line開始	2011 TBS『トップ5』
2011 東日本大震災	2014 Radiko エリアフリー開始 ← 月額350円で地域外ラジオの聴取可能 2014 TBS『お悩み解消系ラジオ ジェーン・スー 相談は踊る』 2014 ラジオセッツインユース首都圏で5%台。10-20代女性は増加傾向。
	2016 Radiko タイムフリー開始 ← 月350円で過去番組の聴取可能
	2017ラジオクラウドアプリ開始 ← 博報堂DYメディアパートナーズ と全国の民間ラジオ放送局一部が共同で展開する スマートフォン用のインターネットラジオサービス 。
	2018 TBS ナイター放送廃止

入江たのし(2017)「今こそ進化のための投資を-ラジオとSNSをめぐる考察」月刊民放2017.2.

小川博司(2009)「ラジオは衰退していくメディアなのか -複数のラジオの時代の「参加型コミュニケーション」をめぐる」マス・コミュニケーション研究 74号.

加藤晴明(2009)「〈ラジオの個性〉を再考する -ラジオは過去のメディアなのか」マス・コミュニケーション研究 74号.

北出真紀恵(2009)「ラジオ・コミュニケーション再考 -“声”(ラジオの話者)を中心に」マス・コミュニケーション研究 74号.

齋藤健作/古閑忠通(2015)「ラジオは、聴いてみたらもっと聴きたくなる?—非接触者への聴取依頼調査から」NHK放送研究と調査 2015.12.

サンスティーン,C.(2003)「インターネットは民主主義の敵か」毎日新聞社.

平和博(2017)『信じてはいけない -民主主義を壊すフェイクニュースの正体』朝日選書
豊田拓臣(2017)「中高生リスナー獲得に向けた試行錯誤—ローカル局の注目番組から」月刊民放
2017.9.
花輪如一(2008)『ラジオの教科書』データハウス.
藤竹暁(2009)「ラジオは人間の鼓動を伝える」マス・コミュニケーション研究 74号.
森綾(2017)「若いリスナーを獲得するために」月刊民放 2017.9